

中世神道と慈遍

竹岡, 勝也

<https://doi.org/10.15017/2339112>

出版情報 : 史淵. 29, pp.97-125, 1943-09-20. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

中世神道と慈遍

竹 岡 勝 也

—

神々の觀念の佛敎的な發達は、中世神道説の興起を促す重大な關係をなすものであつた。併しながらこの時、一方外宮神官の間から擡頭して來て居る伊勢神道の發達があつた事も顧られなければならない。その經典とされるものは神道五部書であつて、二所皇太神宮の由來を明らかにすると共に、外宮の祭神豊受大神を國常立尊、及び天御中主神と同一神となし、しかも天孫の大祖として、これを天照大神と並び位せしめ、また天照大神と幽契を結んで、永く天上天下を治め給ふと語られる等、明らかに一つの目的を以て、外宮神官の手に僞作されたものであつた。これを著作するに當つて顧られて居るものは、矢張り日本書紀、舊事本紀の神話であり、兩宮御鎮座の由來であるが、その中から豊受大神即ち國常立尊であると云ふ結論を導き出すためには、色々の構作を必要とした事は云ふまでもない。かくしてこゝに

於ては神話の新たな形態が構成されて來て居る。この時一方に於ては神佛の習合が進められ、また儒家、道家の世界觀もこれを無視する事は出來ないと云ふ状態に置かれて來て居る。従つて神話を再構成するに當つて、與へられて居る課題は、書紀や舊事紀の場合と同様である事は出來なかつた。即ちこゝに於ては、國常立尊は大元神の名を以て呼ばれ、しかもそれは希夷視聽の外氣氤氣象の中、虚にして靈あり、一にして体なき存在として語られる。また神道は混沌の堺を出で、混沌の始めに歸ると云ひ、神を敬ふには清淨を以て先となすと云ひ、その清淨に就てはまた「その品一に非ず。或は正直を以て清淨となし、或は一心不亂を以て清淨となし、或は六色の禁法を以て潔齋の初門となす」と語られる場合もあつた。矢張りこゝは新に托されたこの時代の課題が、色々の形に於て作用して來て居る事が見られなければならなかつた。五部書の場合に於ては、是等の課題に對する解答は極めて断片的な形を取つて居る。その間には時に矛盾があり、連絡を断たれる場合があつて、到底完成された神道説としての體系をこれに求める事は出來なかつたのであるが、五部書の後にはまた續々としてその流れを汲む神道書が著作せられ、遂に鎌倉の末に至つて、これを集大成したと云はれる、度會家行の類聚神祇本源の著作を見る事になつたのである。この神祇本源は、獨り伊勢神道の經典を集大成したと云ふ丈のものではなかつた。例へばその天地開闢篇を見るならば、これは漢家、本朝、釋家の三部に區分せられ、漢家にあつては老子道德經、同述義、莊子、周易、三五歷紀、淮南子その他、本朝に於ては日本書紀、先代舊事本紀、神道五部書、神皇系圖、神皇實錄、天地麗氣府錄、寶基御靈形文圖等、釋家に於ては大和葛城實山記、長阿含、

圓覺經その他、かくの如く廣き範圍に互つて世界の生成、天地の開闢に關する多くの説話が採録されて居る。以下の諸篇皆同様の形態を取り、その博覽驚くべきものであるが、唯最後の神道玄義篇は、これまでの諸篇とは稍その性質を異にするものがあつた。即ち著者の言葉に従へば、餘卷に於ては本文を載せて釋義には及ばなかつたが、これは専ら以上の本文に就て、旨歸を決する事を目的としたものであつた。そして先づ「神祇の古典、天地開闢を以て叡となすか」と云ふ質問に答へ、神祇の古典は、多く天地開闢を以て叡として居るが、神道に於ては寧しろ志す處は機前を以て法となし、行ふ處は清淨を以て先となす事をその門風とする事を語り、清淨及び機前の説明としては、主として五部書の本文を引用して居る。かくの如くこゝに於てもその解答は五部書、その他彼が權威と仰ぐ多くの神書に求められ、こゝに一家の見解を加へる事は、遂に私曲として廻避されなければならなかつた。かくして天地の開闢、神々の出現、兩大神の位、中臣祓の由來等に就ての多くの問が提示せられ、同様の方法に依つて、それ／＼これに解答が與へられて居るのであつた。何れにするも注目される事は、矢張りその引用極めて宏汎に互り、就中天地麗氣記その他に依つて多量に佛教神道の要素がこれに加へられて來て居る事であつた。それは本文の場合と同様であつて、その結果、伊勢神道の教理的な組織が進められて來たと云ふよりは、寧しろ一層廣く中世神道の複雑な要素を包攝し、却つてこれを雜駁ならしめる事になつては居るが、同時にその奥義を解明する事に依つて、神道世界觀の統一を、歴史に托する意圖を伴ふものであつた事も見逃がす事は出来ない。殊に等しくこの時代の課題であつた神佛の關係に就て彼は最後に次

の如く語つて居る。

神道之奥蹟、古典之旨歸、大底雖一致、依見有異端。或就定惠陰陽之二道、即配胎金兩部。或依尸棄光明之梵号、偏類色界天衆。是不得口次、無相傳之故也。同名異體、異名同體、俗物有之。神道亦然。佛家面智具定。故廻右爲巡。神道面定具智。故廻左爲巡。有形位二分爲佛神。泯形位、性相惟一云々。

即ち神佛は形位の上の差別であつて、形位泯すれば性相も早一に歸着する。かくして神佛を超越した、圓融寂然の世界に自己の本分を見出し、これを以て神道の風光として居る處、一面道家としての彼の風格を忍ばしめるものあるとも云はれるのであるが、「編作更に私曲なし」と語つて居る彼の態度は、遂にこの神道玄義篇をさへも、雜然たる智識の堆積に終らしめ、自己の本分を本とした神道世界觀の樹立は、こゝに示されるには至らなかつたのである。そして家行が受け取つて、更に次の時代に殘したこの課題は、やゝ遅れて慈遍の神道説の展開を促して居る關係も見られなければならなかつた。

二

慈遍の傳記は、今日尙明瞭を缺くものがある。本朝高僧傳卷十七には、その傳記を収めて居るが、これに依れば、釋慈遍は京師の人であつて、吉田の卜部兼顯の子であり、兼好の弟に當つて居る。早く叡山に登り、碩匠に近事して台教を學び、また神書に博通し、後醍醐帝は召して、神道佛法の事を問はせ給ふた

大僧正に任せられ、また神風和紀三卷の著作があつて、世に行はれて居る。その卒年を詳かにしない。僅かこの數行を見るに止まるのである。しかも卜部系圖は、慈遍を以て兼好の兄とし、その他尙異説もあるが、この慈遍傳に立ち入る事は、必ずしも本稿の目的とする處ではない。唯慈遍が心を神道に寄せらるに至つた由來に就て、神風和紀には次の記事ある事を注意して置く。

抑慈遍聊神道に趣き、殊に靈驗を憑み奉る起りは、去にし元徳の年、夢の中に神勅を承るに依つて、先神懷論三卷を撰み、佛神冥顯の理、眞俗の興廢を明らむ。然を故官長常昌三品奏聞し奉しかば、歡覽ありて已に綸言を下され、御祈申すべしとなん。其次の日、比叡山へ行幸と聞え侍り、其後兎角有て、思の外に隱岐に渡らせ給し間、且は皇道の廢れん事を歎て、常昌卿頻に神宣の趣を委極むべき由すゝめ侍りしかば、御願を祈申さんが爲に、取分て神道を撰び奉る。謂る舊事本紀につきて、其玄義、文句、各十卷、又太宗秘府につきて、其要卷六卷を記す。并に神祇玄要の圖三卷、神皇畧文圖一卷、古語類要集五十卷、又其外一卷、以上八十一卷、既に上覽に備へ奉りぬ。今亦忝くも國母のみことのりを承て、此の和紀を三卷しるし上る所也云々。

慈遍が外宮の神官と親交あり、かくして伊勢神道の經典が慈遍に傳へられて來る關係は、これに依つて明らかであるが、更に度會常良（常昌と同人）は神道書記緣起の序文に於て、次の如くその由來を語つて居る。即ち嘗つて一人の僧侶が、瑞籬の縁邊をトし、二宮の法樂のために、法華の圓意を講じて居る事があつた。これを聞くに、萬句に通達し、千章を總括し、その尋常の僧侶でない事は明らかである。

が、就中驚くべき事には、彼は佛惠の玄極に因つて、神乗の幽致を述べる。閑かに云ふ處の旨趣を聞くに、専ら累祖の傳來と一致すると云ふのである。依つて常良は感に堪へずして、その神道の由來を尋ねるに、彼は唯微笑して、靈夢の雅訓を答へるに過ぎない。かくして常良と慈遍との交渉は開始せられ、しかも舊事本紀玄義を初め、彼の神道書の多くは、常良の請ひを機縁として筆を進めたものであつた。

何れにするも伊勢神道の傳統を繼承するに先立つて、慈遍には一種の神道説が構成されて居た。そしてその神道説は、伊勢神道と符合すると云はれて居る事に依つて見れば、矢張り書紀や舊事紀を典籍とし、更に類聚神祇本源が残したこの時代の課題を受け取つて、或は佛教的に、或は儒教的に、その解釋を展開したものであつたらうと考へられる。そしてそれは慈遍を古來古典研究の傳統を持つ吉田家の出とし、早く叡山に天台を學んだと云はれる彼の傳記に誠に相應しいものがあると云はれなければならぬ。併しながら彼の神道説の發展は、外宮神官と交りを結び、禁河の書と云はれる五部書等が、彼に傳へられた事に依つて導かれたものである事は云ふまでもないであらう。同時にかくして伊勢神道の傳統を繼承した事は、中世神道の間に占める彼の神道説の地位を重大にし、伊勢神道と佛敎神道とを融和せしめ、更に吉田神道の一つの源流をなすと云ふ、宛かも中世神道の淵叢をなすかの如き立場に置いたものであつた。

慈遍の著作としては、先に神懷論三卷、既に上覽に備へ奉つたと云ふ八十一卷の書、及び神風和紀三卷が擧げられて居る。その多くは已に失はれ、今日傳へられて居るものは、神風和紀と舊事玄義の中五

卷、及び叡山文庫藏本として、天台宗全書に收められた天地神祇審鎮要記三卷とがある。その著作年代は舊事玄義は、常良の序文及び神風和紀が語る處に依れば、元弘二年の著作と推定せられ、天地神祇審鎮要記三卷は、その序文に依れば、元弘三年の著作であつて、神風和紀は、興國元年七月から九月にかけて筆を執つた旨が述べられて居る。この中にあつて、舊事玄義は一、六、七、八、十の五卷を失つて居るが、第五卷の末尾には

六、七卷乃明_三神佛同体、第八卷以明_二本誓同異、第九卷正明_三神寶出現、第十卷爰明_三記事靈應云々。とあり、神風和紀と照應する事に依つて、その大要を窺ふ事が出来、殊にこの玄義は、古來、四、五、九の三卷は深秘の卷として、最も重要視されて來たものであつた。これが今日にまで傳へられ、神風和紀及び審鎮要記と相俟つて、慈遍の神道説は、略その全貌を示して來ると云つても良い。是等に依つて以下暫らくその所説を窺つて見なければならぬ。

三

慈遍が自らの神道説を展開するに當つて、先づ第一に願われなければならないものは、書紀と舊事紀とであつた。殊に舊事紀に對しては玄義、文句各十卷を著作して居るのであつて、これが神道の經典として、重要な地位に置かれた事は云ふまでもない。併しながら舊事紀は、要するに神代の古傳を歴史的に配列し、その記述は更に人皇の時代にまで及んで來て居るものであつて、その編纂を支配して居るもの

は、矢張り歴史的な意識であつたと云はれるのである。これが神道の經典として、この時代に再生して來るためには、更にその深意が解明せられ、世界の深秘が汲み取られなければならなかつた。この使命を受け取つたものは即ち舊事玄義であつたと云はれるのであるが、その深意を解明するためには、また數々の神書、佛書、漢籍、その他諸般の記録に、その典據を求めなければならなかつた。神書としては先づ御鎮座本紀、寶基本紀、倭姬命世紀等、五部書を初めとして、神皇實錄、神皇系圖、天口事書、太田命傳等、伊勢神道の經典が擧げられる。併しながら彼は單なる伊勢神道の繼承者を以て任ずるものではなかつた。彼は更に太宗秘府、天地麗氣記、同府錄、兩宮形文深釋、仙宮秘文、その他大和葛城寶山記、三寶輔行記、日吉本記、扶桑明月集と云ふが如き、佛教神道關係の數々の著作、記録の類に注目し、殊に行基の著作と傳へられる太宗秘府に就ては、自らその要卷六卷を記したと語つて居る。

以上は神書の場合であるが、尙彼の著作の中には、涅槃經、仁王經、悲華經と云ふが如き各種の佛典、及びその釋義の類、或は老子經、老子述義等、道家の書を初めとして、漢籍の名を連ねるもの、少くない事を見るのである。そしてかくの如く宏汎に互る内外の典籍は、矢張り何等かの意味に於て、彼の神道説の展開に參與しなければならなかつた。

彼の神道説は、神風和紀に於てその大要が盡くされる。そしてこの神風和紀は、神道大意、天地開闢之事、天神七代之事、地神五代之事、兩宮鎮座之事、祖神大分之事、神態忌物之事、尊神靈驗之事、佛神同異之事、佛神誓別之事の十條から成つて居る。舊事玄義及び審鎮要記は、更に詳細に、その處々に

相應する内容を展開して來るのであるが、こゝに於ては慈遍の神道説に於て、特に注目せらるべき、次の三つの問題をとり上げて見たいと考へる。一つは神佛の關係であり、次は冥顯の問題、第三は玉法の問題である。

神佛の調和を根據付ける事は、中世神道に托された重大な課題であつた。かくして佛教各派の神道説が興起して來たと云ふ丈ではなかつた。類聚神祇本源の作者も、神佛は唯形位の上の差別であつて、形位混すれば性相も早一に歸着する事を語つて居る。慈遍の神道に於て著しく現れて來て居るものも、矢張りこの神佛一體論であつて、唯この一體論には、注目せらるべき色々の點が含まれて居る事を見るのである。即ち彼は審鎮要記の中に、佛は即ちこれ神なりと語り、或は國常立尊は三世常住遍一切處であつて、これ即ち法身であり、これに對して天御中主は報身、諸世二尊は應化身であることされ、この神々の發生は堅に次第すと雖、横に同時にありであつて、「一生二、一生三、三生萬物」と云はれる天地生成の一切の可能性は、この四尊の性格の中に含まれて居た。然らば何を以てこれを神と云ひ、佛と呼ぶのであるか。舊事玄義には、これに就て次の言葉を聞く事が出来る。神は則ち諸佛の靈、佛は則ち諸神の性、更に人は則ち神の主、神は則ち人の魂であると云ふのであるが、この神佛一體論を以て、中世神道の課題に答へるためには、尙解決されなければならぬ色々の問題が存在した。就中五部書に依つて、彼は「指西天告有神應、永止託宣遂讓佛教」と云ふ言葉を語り、同時に「我滅度後、現大明神、廣度衆生」と、悲華經その他に依つて傳へられる本地垂迹の思想を擧げて居る。この神佛關係

の二様の形に對し、彼の神佛一體論は、如何なる解答を與へて居るのであるか。この場合の一つの問題は、五部書の歴史觀にかゝつて來る。即ち神代にあつては、天地未だ相去る事遠からず、冥顯遙かならず、諾卅二神の如きは、已に男女の姿はあつたが、身に光あつて、日月の光をからず、また思ひに隨つて自在に飛行する事も出來た。然るに時代が降ると共に、天地は遠く離れ、冥顯の隔り漸く明らかに、従つて人間はまた神々を遠ざかつて穢惡の心を生じ、故に生死長夜の闇に沈み、根國底國に吟ぶと云ふ状態に陥つた。大神は自らの託宣を以てするも、これを教諭する能はざるを知り、その託宣を止め、教化を佛法に托して、本居に歸へられたと云ふのであるが、これは獨り我國に限らず、漢土に於ても同様の關係を見る事が出來る。即ち嘗つては老莊があり、孔子や顔回があつて、それ〴〵道を説く事があつた。然るに人心惡化するに及び、老子は西方を指して、彼に聖人あり、我が師たりと稱し、佛法が末代の教法である事を示したと云ふのであるが、是等の言葉に依つて見るならば、この時代に行はれた一切の教法に對し、彼は先づ道は互ひに相通じ、教は遂に一法に歸するを云ふ、極めて抱擁的な態度を以て臨んで居る事が窺はれる。そしてこれは寧ろ中世神道家の一つの性格をなすものであり、中世神道を以て晦澁ならしめて居る所以、またこゝにあつたとも云はれるものであつた。

兎に角慈遍の場合に於て、神佛はかくの如き關係に置かれるものであり、従つて一切の經文はまた大神の託宣として見られる性格を持つものなるが故に、この間に極めて自由に、自らの神道説を展開せしめる事が出來たのであつた。然るに五部書に依るならば、その大神は一方、神人は混沌の始めを守つて、

佛法の息を屏けると云ふ託宣を下して居る事がある。それは如何なる意味に於て理解せらるべきものであるか。慈遍に依れば、神道は一法未だ起こらざる處を守つて、起こる處の一切の穢惡を忌むものであり、これに對して佛法は、已にその起こる處に就て、眞俗の二諦を立て、迷悟の別を論じ、剩へ佛見法見を起こして、我相驕慢を本とする事あるが故に、しかも濁世末代に至つては、僧尼は墮落し、佛法にも異端が現れ、法と人と相伴はざる場合あるが故に、特に大神は僧尼を忌む事を示されたものと云つて居る。併しながらこれは大神に限らず、已に經文の中に於て、その戒しめは見られるのであつて、これを以て神佛の關係に動搖を齎らすものであるとはされなかつた。

何れにするも五部書に於て分裂して居た佛敎に對する二つの態度は、かくして彼に依つて統一せられ、神佛はその根本に於て一體であると言はれたのであるが、併しながらこゝに於ても、尙先に提出された神佛關係の矛盾、即ち本迹關係の二様の形態は解決されて居るとは云はれないものがある。然らば一方に於て、我滅度の後大明神と現じ、廣く衆生を度せんと云ふ佛本神迹の思想を受け取つて來て居る慈遍が、如何なる意味に於て西方の佛を以て神の應迹とする思想を發展させて來て居るのであるか。これには更に彼の言葉を検討して見なければならぬ。

慈遍はその神道説に於て、しばしば神を以て本地とする、所謂反本地垂迹の形を示して來て居る。例へば舊事玄義に於て、彼は神には體用の別ある事を語り、これに就て、その用は彼と是とを隔てず、一切諸國皆神恵に漏るゝ事なしと雖、その體は獨り我國に止まつて居る。従つて等しく神恵に漏るゝ事な

き世界の中にあつて、特に靈地を求めらば、それは我が日本である。これを以て我國はまたこれを神國と號するのである。更に我國と他國との關係を論ずるならば、我國は三界の根であつて、余州を尋ぬれば、それはこの國の末である。我國は種子の芽の如く、一見幼くして春の草木の未だ成就するを得ざるに似て居るが、その功用を論ずれば、本はこの神國にあり、これに對して唐は枝葉に當り、梵は花實に當る。従つて我國は、嘗つては神の託宣を以て天下を治めたが、後佛法が渡來し、またこの佛法渡來する事に依つて、神は却つて威光を添へる事が出來た。これを以て神宣西天の佛を指して、これを自らの應迹となした。彼の孔老が仰いで以て師となした佛が、神に歸するに於ては、も早本末は明らかでないければならないと云つて居る。宛かも花落ちて根に歸るが如く、佛は神の應迹であつて、神佛の間に於ける本地垂迹の關係は、全くこゝに顛倒されてしまつたのであつた。

この反本地垂迹説は、この後しばしば記録、文學の類にまでも現れて來る。例へば天平記卷十六、日本朝敵の事の條には、「第一の御子天照大神、此國の主と成りて、伊勢國、御裳濯川の邊、神瀬の下津岩根に跡を垂れ給ふ。或時は垂跡の佛と成りて、審に出世の化儀を調べ、或時は本地の神に返りて、塵々利土の利生をなし給ふ云々」と云ふ言葉があり、舞曲百合若大臣の中にも、「神の本地を佛とは、よくも知らざる言葉かな。根本地の神こそ、佛とならせ給ひつゝ、衆生を化度し給ふなれ」と云ふ言葉が見られ、吉田神道の經典、唯一神道名法要集には、矢張り佛教は萬法の花實であり、儒教は萬法の枝葉であり、神道は萬法の根本であつて、佛教、儒教は共に神道の分化であると稱せられ、或はまた顯露の顯に

従へば、佛は本地であつて、神は垂迹であるが、隱幽の密に従へば、神が本地であつて、佛は垂迹であると稱せられる等、次第にその重要性を加へ、神々が佛の支配から獨立して、一つの世界觀を構成するに至る過程を示す思想として、やがては神佛の分離を導く關係をなすとも云はれるのであるが、これが慈遍の神道説に於て、已にかくの如く顯著に現れて來て居る事は注目されなければならなかつた。そして慈遍の著作を通じて見るならば、この思想を慈遍の神道説に導いて來る關係として、二つの經路が辿られる。一つは神道五部書であつて、寶基本紀が傳へる處の

因_レ茲奉_レ代_ニ皇天_一、西天真人以_ニ苦心_一誨諭。教_ニ令修善。隨_レ器授_レ法以來、大神歸_ニ本居_一、止_ニ託宣_一給倍利云々。

と云ふ言葉である。この言葉が舊事玄義に於ては、

指_ニ西天_一告_レ有_ニ神應_一、永止_ニ託宣_一、遂讓_ニ佛教_一。

とされて居る事は、已にこれを見た。即ち我國は三界の根であり、唐は枝葉であり、梵は花實である。故に大神は託宣を下し、西天の佛を指して自らの應迹となした。そして神風和紀には、明らかに西天の真人とは釋迦如來の御事なりと語つて居る。即ち釋迦は神明に代つて世に現れ、神明は釋迦に讓つて託宣を止めたと云ふ事になるのであるが、これに依つて見るならば、彼が神の應迹となした佛は、直接には釋迦如來を意味するものであり、この關係は一つには五部書の言葉に對する解釋として導かれて來たものである事が知られるのである。

今一つこの關係に就て注目されるものに、彼が舊事玄義に引用して居る、日本宗祕府の言葉がある。日本宗祕府は、恐らく太宗祕府の別名か、或は太宗祕府を誤寫したものであつたらう。何れにするも太宗祕府と同一書と考へられるのであるが、この太宗祕府は、行基の作と傳へられる、彼に先行する佛敎神道の書であつて、しばしば彼の神道説の展開を導き、彼にその要卷六卷の著作ある事は、已にこれを述べた。然るに彼は玄義の卷五に於て、物には體用あり、通別ある事を語り、

既論_二體用_一者、當_レ有_二通別_一。別則神體、通則神用。其用廣遍_二一切諸國_一、其體獨在_二此朝_一。神地應_レ知。餘州通雖_レ曰_レ神、若論_二靈地_一、別在_二日本_一。如_二日本宗祕府曰_一云々。

と述べて、別して我國は大日の靈地であり、神國である所以を根據付けて居る。即ち神恵に漏るゝ事なき世界の中にあつて、我國が根本である關係は、已にこゝに準備されて居るとも云はれるものあり、これを受け取つて、一段の展開を示したものが慈遍の反本地垂迹説であつたと云ふ關係が窺はれるのである。

かくの如く慈遍に於ては、我國は世界の根本であり、神の止まる處であり、またその神の應迹こそは西天の佛であり、釋迦如來であると言はれたのであるが、然らば悲華經が語る處の我滅度の後大明神と現じ云々と云ふ言葉は、これに依つて否定されなければならないのであるか。換言すれば彼は敢然として佛を本地とするこの時代の神佛關係に戦ひを挑んだものと見られるのであるか。この關係を明らかにするためには、今一つ注目されなければならない、重大な問題が残されて居る。即ち彼は神風和紀の中に、

凡そ冥衆に於て三つの道ある事を擧げ、これに就て、次の如く語つて居る。

凡そ冥衆に於て大に三の道あり。一には法性神、謂る法身如來と同體、今の宗席の内證是也。故に此神には本地垂迹とて、二つを立る事なき也。二には有覺の神、謂る諸の權現にて、佛菩薩の本を隠して、萬の神とあらはれ玉ふ是也。三には實迷の神、謂る一切の邪神の習として、眞の益なく、愚なる物を惱し、僞れる託宣のみ多き類是也。されば此邪神共、僞て大神の託宣と云ひて人をたぶらかし、猥りに惡道へ引入べきが故に、宗席末を鑑て、託宣を止め玉ふ也云々。

これに依れば法性神は即ち宗席の内證であつて、これこそ西天の眞人として應迹した、即ち佛の本地である神に該當すると云はれるのであるが、神には更に有覺の神、即ち佛菩薩を本地とする一群があつて、本地垂迹の關係は、矢張りこの有覺の神に就て、彼にまでその發達を續けて來て居るのであつた。

然らばこの冥衆に於て三つの道ありとする思想は、如何なる典據に依つて、彼の神道説に取り入れられて來たものであるか。彼はこの個條に對しては、僅かに邪神共が大神の託宣を僞る事に就て、故に大神は託宣を止めて本居に歸つたと云ふ寶基本紀の言葉を擧げるに止まつて、この神々の分類に就ては、何等の典據をも示して居ない。然るに審鎮要記には、一層詳細に神類の三等を解説すると共に、更にこの三等を開いて十七位となし、この十七位の神々に就ては、明らかに神號靈氣記に云ふが如しと語つて居る。即ち靈氣記は、その卷十が神號靈氣記であつて、これにはこゝに十七位と稱する大元祖神、天大廟神、地宗廟神、社稷神、天神、地祇、垂迹神、實迷神、實悟神、事神、理神、智神、體神、相神、用神、實

相神、虚空神、その他尙種々雑多な神々の名稱が擧げられて居る。慈遍は三等の神類を開いて十七位となる事を語つて居るが、この十七位の神々は、寧ろ神道説の發達に伴ひ、現れて來た神々の名稱を雜然と配列したと云ふ性質のものであつて、この間に必ずしも統一があるものではない。寧ろこの十七位の名稱を、神號麗氣記から受け取つて、これを三等に整頓し、神々の分類を新にしたものとは見られないであらうか。併しながら已に麗氣記に於て、實悟神、實迷神なる言葉の發生が窺はれ、またしばしば慈遍がその神道説の典據として擧げる處の兩宮形文深釋には、

故二所内外兩宮則遍照智性、不去不來白淨光明、周遍天地、而遊心法界。故神是天照不動之理、卽法性身也。謂之名實相一也。

と、法性身の名が使用されて居る事を見るのである。慈遍は矢張りこの發達を繼承したものであつた。

尙この形文深釋と共に、空海の名に托される中臣祓訓解附録の傳授には、明らかに「大方神には三等あり」とあつて、本覺、始覺（又實悟神）、不覺（又實迷神）の三類が擧げられ、諸神本懷集に於ける阿彌陀如來と權社、實社とは、矢張り類似の關係を示し、果して慈遍と何れがその先後をなすかに就ては、尙考證の餘地が残されるであらう。併しながら更に降つて法華神道秘訣には、これが法性神、有覺神、邪横神として採用されて居る事を見、何れにするもこれは中世佛教神道を通じ、最も權威ある神々の分類であつたと云はれるのであつて、これが早く慈遍の著作に現れて來て居る事は注目されなければならぬ。然らば審鎖要記は、この神類の三等を、如何に解説して居るのであるか。次にその全文を引用し

て見る。

其三等者、性、覺、邪也。亦各可_レ知_二解釋料簡_一。謂性等具可_レ云_二法性等_一。夫靈性遍_レ物無_レ有_二闕少_一。其性難思但有_二名字_一。所以稱爲_二大日靈貴_一。應_レ知依正皆在_二性等_一。眞性本有、而國常立出_レ相含_レ氣。天御中主不變隨緣而相常住。德用現_レ光天照大神。月輪有_レ像是名爲_レ尊。性相凝然三世常恒。如是開覺呼曰_二覺等_一。此性彼性、性無_二別性_一。前覺後覺、覺皆等耳。覺雖_二無異_一、隨_レ機示_レ本。諸權現皆覺等迹也。然邪等則從_レ性雖_レ起、被_レ索_二妄緣_一、而爲_二邪神_一。亦名_二邪橫_一、或云_二實迷_一。其元神則素戔嗚尊。其末靈則地祇部類。本有惡性假_レ緣薰習。各酬_二強念_一、居_レ冥作_レ神。一妄衆妄、故云_二邪等_一。有_レ權有_レ實細尋可_レ了。

用_二料簡者_一、邪橫權實其意云何。答。十界互具、其性一如。邪正隨緣權實應_レ物。普現_二色身_一、不_レ簡_二凡聖_一。和光同塵、何隔_二善惡_一。實迷迷_レ相、邪等等_レ性。迷悟隨緣、權實在_レ心。問。若爾何弁_二三等別_一耶。答。三等互融、三道卽_二三德_一。性淨無礙、相穢何定。實迷深則垂迹忌_レ本。受_二法味_一則宜_レ歸_二性等_一。當_レ知神冥法味爲_レ食。若無_二法味_一何神得_レ力。故正法廢、善神去_レ國。經文分明。如_二通別論_一。仍迷與_レ覺並成_二本迹_一。若無_二轉迷_一、安有_二權實_一。問。於_二性等神_一有_二本迹_一耶。答。性猶難思。何論_二本迹_一。故論_二權實_一在_二後_一二等云々。

即ちこゝに語られて居るものは、寧ろ諸法は實相であり、十界は互具であり、性は淨無礙なるが故に穢相は不定であると云ふ天台の世界觀であるが、神類の三等はこの世界觀に配當せられ、しかも法性等の神は、本迹の關係を超越する存在として語られる。果してこゝに擧げられる大日靈貴、國常立、天

御中主、天照大神、素戔嗚尊等の配列、及びその性格は、彼の神道説の他の個條と矛盾する事なきか何うかは別として、兎に角佛教世界觀に照らして神々の存在を根據付けんとする佛教神道の發達は、彼に於てかくの如き展開を示して來た。そしてこの三等の分類を適用する事に依つて、伊勢神道と佛教神道と、その發達の經路を異にした二つの神道説を繼承し、さしも困難を極めた神佛關係に一應の解決を與へる事が出來たのであつた。そしてこれは中世神道に於ける、慈遍神道の著しい功績であつたと云はれなければならぬ。

四

次は冥顯の問題であるが、この問題は一面また王法の問題を根據付ける關係に於かれて居る。即ちそれは生死の問題であり、萬物の生滅流轉がかゝる處の問題であつて、彼の世界觀と密接な關係に置かれるものでなければならなかつた。そして彼は已に神類の三等の分類に於て、その世界觀を展開して來て居る。即ち物に普遍する靈性であつて、思ひ難く唯名字のみある大日靈貴、相に出で氣を含むと云はれる國常立、不變隨緣して相常住である天御中主、かくの如き神々の配列は、世界の根元に於て、横には現に萬物に普遍する靈性の存在を認め、これが氣を生じ、或は隨緣し、或は分化して萬物を生ずると云ふ、緣起説と陰陽五行説とを混用した彼の世界觀を示すものでなければならなかつた。従つてかくの如き意味の大日靈貴は、法性とも、一氣とも云はれる事が出來るのであるが、伊勢神道を繼承した彼の立

場から見るとすれば、それはまた神であつて、この大日靈貴、時には國常立とも呼ばれて居る神靈を、世界の根元とする事に依つて、始めて彼の世界觀は、神道的な性格を帯びて來るのであつた。

何れにするも彼は萬物に普遍する神を見ると共に、また世界の根元を神として理解した。この限りに於て彼は確かに神道家であると云はれるのであるが、併しながらこの元神から世界の生成が導かれて來る關係に就て、最後まで彼を支配して居るものは、寧ろ陰陽五行説であつたと云はれるのである。従つてこゝに問題とする冥顯の問題も、先づ陰陽二儀の關係に依つて理解されなければならなかつた。即ち先づ天地分れて冥顯ありと稱し、冥は即ち死であつて、これは陽を變じて陰に歸する事を意味し、顯は即ち生であつて、これは陰を化して陽を現はす事を意味するとされる。然るにその陰陽に就て、彼は玄義に、「凡一切有情、有_レ心有_レ形、形是爲_レ陰、心是爲_レ陽」と語り、しかもその心と形とは、次の如き關係に置かれるものであるとする。

原性命受_ニ化於心_一、心受_ニ之意_一、意受_ニ之精_一、精受_ニ之神_一。形體消而神不_レ毀。性命既而神不_レ終。又曰神者生之本、形者生之具也云々。故受_レ形者必有_ニ生死_一、論_ニ變化_一則皆陰陽也。

同様の關係が審鎮要記にはまた

形體易而神不_レ變。性命化而神常然。因以名_ニ國常立_一。以_レ初爲_ニ常義_一者也。

と語られ、即ち陰陽の作用に依つて生死の現象は現はれるのであるが、この作用の及ぶ處は、生の具である形體と、これに伴ふ性命とに限られ、生の本である神は、生死の外に置かれるものでなければなら

ない。しかも陰陽本一氣なるが故に、生と云ひ、死と云ふも、その體二つあるものではなく、心神、色靈はその性遂に一に歸する。かくして生に從へば則ち冥は化して顯となり、死に從へば顯は化して冥に至り、陰陽互ひに轉じて生滅流轉の現象を續けるのであるが、性の本である神に就て云ふならば、性命化して神常然であつて、それは生滅流轉を超える存在であり、この神を自覺する處に、「元々超生、本本出死」と云ふ言葉は適用せられ、これはまた清淨とも、大達とも呼ばれ、彼の神道に於ては極めて重大な意味を持つものであつた。

かくの如く萬物の生滅流轉は、一元氣の分化である陰陽二儀の作用、即ち陰化、陽化の關係に於て、一應の解決を見たのであるが、然らば矢張り神道的な關心がかゝる處の淨、不淨の關係は、如何にこの問題と關聯して來るのであるか。彼は一面五部書に從つて歴史の降下、人間の墮落を認めて居る。即ち神代の昔にあつては皆これ神であつて、神力未だ廢せず、この時天地相去る事遠からず、冥顯遙かならずと語られるのであるが、世降つて人の世に至れば、悉くこれ人であつて、靈徳已に隱れ、しかも人は天地の靈氣を受けて、靈氣の化する處を貴ばず、神明の光胤を種としながら、神明の禁令を信ぜず、故に生死長夜の闇に沈み云々と、五部書の言葉をこゝに引用して來る。そして人間の墮落は、彼の神道に於ては、矢張り陰陽の關係に於て理解されなければならぬものがあつた。即ち女義には、淨穢本一也。元氣雖淨陰陽現穢。是以二尊始顯男女之形、示穢相。是元氣化用也。

と語られ、元氣は本來清淨であるが、これが陰陽二儀に別れ、萬物の生滅が現象すると共に、こゝに穢

惡が現れて來る。併しながら陰陽の作用も要するに元氣の化用に他ならないが故に、淨穢は本一つであつて、その本源を追及するならば、遂に本來清淨である元氣に到達すると云ふ關係がこゝに示されて居る。この關係は先に神類の三等に於ける邪横神に就ても見る處あつた。即ちその元神は素戔嗚尊であつて、本有の惡性縁を假りて薰習すると云はれるのであるが、その惡性と雖、もと性より起るものであり、性は淨無礙なるが故に、穢相は不定であつて、法味を受くれば是等の部類もやがて性等に歸すると語られて居るのであつた。一方は現象する萬物一般の問題であり、一方は邪横神の問題である。併しながら共に穢相の根元と、その展開とを説く事に於て相通するものであり、しかもこゝに於ては矢張り陰陽の作用に基く萬物の生滅と、諸法は實相であると云ふ天台の世界觀とが結ばれて居るのであるが、何れにするも生死の世界には、穢惡は免れ難き關係に置かれるものであつて、それはまた已に靈徳を失つた人間の姿でもなければならなかつた。従つてこゝに問題となつて來るものは、穢相の超克であるが、穢相の原因が生死にあるとするならば、穢相の超克は、この生死の超克にかけられなければならないであらう。こゝに彼が注目したものは、神人は混沌の始めを守ると云ふ五部書の言葉であつた。即ち元を元とし、本を本とする事を以て清淨となし、これは陰陽未分の本源に住する事を意味するものであつて、この清淨を道とする事に依つて生死を超越し、穢相を克服する事が出來るとするのである。彼の場合に於て混沌の始めを守るとは、かくの如き關係を意味するものでなければならなかつた。

兎に角五部書の思想は、慈遍に於てかくの如き發展を示して來た。尙陰陽に就ては、天は陽、地は陰、

心は陽、形は陰、陸は陽、海は陰と云ふが如く、色々の場合が擧げられ、しかも

孤陽獨不_レ起、但陰獨不_レ立。故國常立天性遍_レ空而含_レ陰德。即國之字也。天御中主地相遍_レ色而含_レ陽胤。即天之字也。

と稱せられ、陽は陰を含み、陰は陽を含んで、極めて複雑な關係を構成して來るのであるが、この關係は曳いて天孫降臨、及び王法の問題にまで適用せられ、こゝに彼の神道説はまた新なる分野を展開して來るのであつた。

王法の問題は、基く處矢張り皇統の尊嚴にかゝつて居る。そして皇統の尊嚴は、歴史の問題ではあるが、その根元は矢張り天地初發の時にまで遡るのであつて、こゝに書紀や舊事紀の神話に對する彼一流の解釋が展開されて來る。そして彼のこの解釋を導いて居るものは、一つには五部書の言葉であつた事は、他の場合と同様であつた。例へば皇統の起元に就て、玄義には、

天御中主與_二大日雲、預結_二幽契、永治_二天下、或爲_二日月、或爲_二神皇、授_二三種璽、繼_二百王位。と語り、更にこれを解釋しては、

天地雖_レ分、神道未_レ變。陰陽隨_レ化、皇德施_レ惠。神皇一人、通被_二百王。德侔_二天地、是名曰_レ皇。皇必通_二神、神定施_レ皇。天神地皇、靈用無_レ窮。爲_レ日爲_レ月、陰陽之惠。爲_レ神爲_レ皇、天地之德。陰德含_レ皇、天御中主。陽道顯_レ神、大日雲尊。合_二此天地、而爲_二一皇。

と語つて居る。これを神話に就て見るならば、

天照大神之太子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、娶皇天御中主尊長男高皇產靈尊之女栲幡豐秋津姬命、生天津彦々火瓊々杵尊。故皇祖高皇產靈尊特鍾愛、以崇養焉。因以受皇天尊號、稱皇御孫尊也。であつて、この關係に就て、審鎮要記には更に次の如き解釋が示されて居る。

天地狹霧陰陽分讓。故於天道而具地德。天孫皇孫而五名者。孤陽孤陰不偏立。故雖陽爲父正其

性祖母天。雖陰爲母栲幡其性祖父高。女陽天男陰高祖母天祖父高。故名天孫德。亦名皇孫地。即

以天地而爲父母。若得偏胤、必非天子。

かくして皇統の尊嚴は、天孫にして皇孫である事にかゝり、天孫にして皇孫であるとは、天地相和して一皇となる關係を示すものであり、この立場から神話に對する彼の解釋は導かれて來たものであつた。次に問題は天孫降臨に移つて來るのであるが、これを神風和紀に就て見るならば、こゝには先づ「天先定つて地の靈光天に顯れ、地既に定つて後天の徳下つて地を主る」と語られる。この立場から神話を解釋すれば、

謂る地の靈光は顯れて天に上る。これを天照大神と申し奉る。其天の源は天御中主神是也。この天の顯れ下る、其徳を高皇產靈神と名付け奉る。この徳に依り終に國の主と成玉へるを皇御孫尊と申奉る也。

と云ふ結果が導かれて來る。そしてこゝに於てもこの皇御孫尊は、天照大神を父方の祖母とする事に依つて天の道を繼承し、高皇產靈尊を母方の祖父とする事に依つて地の徳を繼承し、この天地の徳を一身

に體されるが故にこれを天皇と曰ふと云はれて居るのであつた。

慈遍は一面に於て、或は書紀や舊事紀を、或は五部書、その他伊勢神道の經典を權威とする事に依つて、極めて紛亂した神話を受け取らなければならなかつた。そのために神々に對する彼の解釋は、往々にして混亂し、昏迷に陥つて居る場合も少くなかつたのであるが、兎に角こゝに於ては明らかに、天孫の降臨は天の徳地に下る事を意味するものとして語られる。そして天照大神と皇御孫尊との關係に就てはまた、「古へ地の靈明自ら天に上りて彼光物を照らす。これを大日靈貴天照大神と申す也。正しく形を顯はし、此國へ下り坐まして、葦原を治め給ひし神をば皇御孫尊と申せり」と云はれる事も出來たのであつたが、然らばこの天孫降臨に伴ふ出雲の服屬は、如何なる關係を意味するものであつたのであるか。この天孫と出雲との關係は、更に天照大神と素戔嗚尊との關係にまで遡られなければならない。そしてこれに就て玄義には、天照大神は女たりと雖陽であつて、故に天に上り、素戔嗚尊は男たりと雖陰であつて、故に地に下ると稱せられ、或はまた天神顯を領し、皇孫世を治め、地祇冥を領すとも云はれて居る。しかも天孫は地を服して顯界を治め、地祇は天に歸つて冥界を掌る。これ天神下を哀み、地祇上を仰ぎ、陰陽昇沈し、天地冥合して、以て萬物の化が行はれる所以であり、この天地の徳を心として政治を行はれるものこそは天皇でなければならぬ。かくして天皇は、天の徳地に下り、天地冥合する處に現れて來たものなるが故に、天の無心にして一雨を降し、地の無念にして萬物を養ふ心を心とせられ、愛憎偏頗の行ひなく、情を天地と齊しくして世を治しめされる事を道とするものでなければなら

ない。この故に天地一人の皇徳を君の道と名付け、我國に於てはこれを神道と呼ぶ事を語つて居る。皇位の繼承に三種神器が伴ふ事は、矢張りこの關係に於て理解されなければならなかつた。即ち三器は天皇の徳を象徴されたものであり、珠は陰陽一極、その徳は天地一心であつて、私無きの心を示されたものであり、劔は起こる處の妄念を斷ずる事を意味し、鏡は自ら無相であつて、萬象を無心に浮べるものであり、これ萬物の精明であつて、神明の御正體とされる所以でもあつた。併しながら詮ずる處、三種の徳は一空に依つて盡くされると云ふ結論に到達して居る。

以上は玄義の解釋であるが、審鎮要記には、更に次の言葉を見る事が出来る。

此三種神器神明精靈。皇徳化侔_二天地。是名爲_レ皇。寶玉天道。雨_レ財養_レ民慈心。寶鏡地徳。明眼鑒_レ國

帝徳。寶劔人惠。平_二天下惡_一王惠_二威甲_一云々。

即ち玉は慈、鏡は智、劔は威であつて、已にかくの如き解釋が慈遍に依つて示されて居るのであつた。尙この神器に對しては、色々の立場から解釋を試みて居るが、何れにするもこの神寶に依つて象徴された無心の心を心とし、自他親疎の隔てなく、普く萬民に天地の徳を施される事を以て王法の極致とされて居る事は、慈遍の神道をして、歴史的に一層その意味を重大ならしめるものであつた。そして天地一人の皇徳は百王に通ずるものである事は云ふまでもないが、天に兩目なく、土に二玉無く、これを特尊と稱し、これを一皇と謂ふと語り、その一皇に就ては

開闢以來歷代繼_レ皇。其數幾世、何限_二乎。今稱_二特尊_一者、唯歸_二當帝_一也。

と、當代毎に皆これ特尊であつて、これは百王に通ずるものである事を語つて居る。

かくの如く皇統の尊嚴を明らかにし、しかも常に當代を以て特尊とし、皇位の繼承に伴ふ三種神器に就て、かくの如き意味を展開して來て居る慈遍の神道は、一方伊勢神道を繼承しながらも、已に伊勢神道を超えるものであつた。それは正に北畠親房の神國思想と對稱せらるべきものであり、殆んど親房とその時を同じくしながら、その神道論に於ては、寧しる親房に先驅する關係に置かれる事も注目されなければならぬであらう。

五

慈遍の文章は必ずしも明快ではない。寧しる晦澁であつて、往々にしてその理解に茫然とする場合がある。それは唯文章丈の問題ではなくして、中世神道そのものゝ性格であるとも云はれるのである。神話の多様の型は雜然としてこゝに渦卷いて居る。神話は歴史的な形態を示して居るが、この歴史的な形態は、神道的世界觀の表現として理解される。この場合に神話解釋に作用して來るものは、佛教であり、陰陽五行説であり、或は道家の思想であつて、こゝに極めて斷片的な所謂神書の言葉が構成されて來て居る。神道は益々晦澁な、解くべからざる昏迷に陥つた。そこには矛盾があり、混亂があり、顛倒があり、中世神道家自らがこの底ひなき渦卷きの中に沈吟しなければならなかつたのである。こゝに於てこそ法然が云ふ選擇は必要であり、そしてその著しい例を神皇正統記に於て見るとも云はれるのであるが、

慈遍は正にその先驅的な立場に置かれるものであつた。親房に比較するならば、慈遍は更に廣き面に於て中世神道を受け取つて來て居る。混亂や撞着と戦ひながら、一筋の糸を繰り出すための慈遍の惱みは、想像以上のものあつたに相違ない。従つて一筋の糸は三筋となり、四筋となる場合もあつたには相違ないが、その一筋の糸は、確かに神皇正統記に繋られる。同時に吉田神道の發達もまたこゝに育まれて來て居る事が見られるのであつて、この意味に於て、中世神道に於て占める慈遍の地位に就ては再考されなければならぬものがあるであらう。それは單に中世神道丈には限られなかつた。遙かに近世神道に呼びかけて居る場合も見られるのであつて、殊に垂加神道の一脈は、直接これと結ばれる一面を示して居る。例へば山崎闇齋が、唯一宗源神道の極秘として、正親町公通に傳授したと云はれる持授抄には、しばしば舊事女義の言葉が引かれて居り、井上頼因翁所藏の舊事女義の奥書には、

一品藤の白玉翁○正親町公通のたまふ。女義は沙門○慈遍、トの編なれども、三種の傳を得たりと見ゆ。然れ

共金銀砂石、錯綜紛雜せるゆへ、具眼の人ならでは吹分難きを、吾塩土翁○山崎闇齋是を拔萃して、風水草に載せられぬ云々。

とある旨、神道叢説に見え、松濤文庫本舊事女義拔萃は、同じ垂加の流れに屬する友部安崇の手に成つたものであるが、これには次の如き序文が附せられてある。

夫吾國神道之洋洋、中古以來其傳之淪沒亦尙矣夫。雖_レ然日神之洪德確乎不_レ動、神宮之舊傳未_レ墜_ニ於地_一。元弘年中有_ニ大僧正慈遍者_一。其姓_ト部吉田兼顯之子、而兼好之見也。故家學之神傳蚤雖_レ聞_ニ其奥

秘、而惑佛遂爲僧、亦可惜也。嘗拜伊勢之神宮、與神官常良講磨數、而常良大感慈遍之神佛混合之說。晤語密談、不憚神宮之秘。於是慈遍巧混神佛、以作舊事玄義十卷焉。垂加先生曰玄義之爲書、固涇渭瑜瑕之甚者。而其粹言皆卜部家之舊傳、且伊勢神官之傳也。君子不以人廢言。故考抄此書四五九之卷中、号四五九抄、以正親町藤原公通卿、是乃十種三種神寶之神理詳具焉。於是公通卿改号自從抄。粵跡部良顯文學垂加先生之神說有年矣。覃思究力、既有深得矣。嘗求玄義十卷、得其第一、第三、第四、第五、第九卷也。其餘第二、第六、第七、第八、第十卷、放失不可得而求。然其不可得而求者、皆不與精義之卷也。亦幸哉。有意披萃之久。而會眼疾大妨功。故命僕披萃之。寶永己丑二月八日。雖書此序、近來所聞因粗有違今改正之一云。

同じ松濤文庫本神風和紀は跡部良源の傳本であつて、これには源良源考として、次の奥書を見る。右神風和紀三冊、考之文字之誤甚多。故改正而書。南朝記中之語、並卜部系圖、以附于其後焉。上中之卷者正說多。故所混佛則加批點焉。下卷者兩部習合而大亂眞矣。考其眞說除牽合附會。以不可惑佛說者也。寶永戊子九月日

そしてこゝに南朝記中の語として擧げる處は次の言葉であつた。

南朝記、後村上天皇興國二年庚辰九月、南朝慈遍僧正、神風和記三卷を作り朝に獻す。

以上に依つて見るならば、垂加神道の展開が、慈遍に與る處少からざるものあつた事が知られるであ

らう。佛説は削除せられ、正説とする處は、寧しろ卜部家の舊傳として、或は伊勢神官の傳として受け取られて居るにしても、それは矢張り慈遍を媒介とするものでなければならなかつたのである。